

書評

久保恵嗣, 藤田次郎 編集

『間質性肺疾患診療マニュアル』

千葉大学医学部・呼吸器内科

巽 浩 一 郎

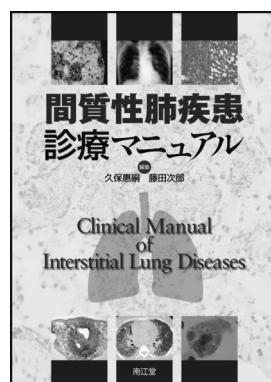
2010年10月10日, 南江堂から久保恵嗣, 藤田次郎両氏の編集による『間質性肺疾患診療マニュアル』が上梓された。遡ること2004年, 南江堂から『特発性間質性肺炎診断と治療の手引き』(日本呼吸器学会びまん性肺疾患診断・治療ガイドライン作成委員会編集)が発刊されており, この時点における特発性間質性肺炎の解説がなされている。それから6年の歳月を経て, 間質性肺疾患の病態・治療等に関する知見が少しずつ加わり, この時点で間質性肺疾患を裏からも含めて再確認してみようということになったと拝察する。

間質性肺疾患を理解するためには, 画像と病理の対比が必要である。本書の第Ⅱ章において, 伊藤春海先生(福井大学名誉教授)はご自身の40年の研究成果の一部をまとめておられる。その中でも印象的な記述をそのまま転記させて頂く。「間質性肺疾患の画像は, 肺の構成単位である, 細葉, 小葉, 区域等の気腔を埋めて形成される浸潤影よりは, 温存された空気を背景に浮かび上がる, すりガ

ラス陰影, 網状影, 粒状影が主体となる。そのため, 間質性肺疾患の画像診断には, 従来のような細葉や小葉に関するマクロ的解剖学を超えた, 肺微細構造に対する理解が必要とされる。(中略)肺既存構造に対する考え方を変えることにより, 画像の理解が変わり, かつ進化する経験を過去40年の間に幾度もしている。その原動力となるのが標本観察であることはいうまでもない。」

本書の編集を担当された藤田次郎氏は呼吸器感染症の専門家でもあり, 『感染症診療ゴールデンハンドブック』(南江堂, 2007年), 『呼吸器感染症のすべて』(南江堂, 2009年)の編集も担当されている。間質性肺疾患を他の領域からも眺めてみる重要性を, たとえば間質性肺疾患と呼吸器感染症の関係, 間質性肺疾患と膠原病の関係など, 今後さらに解明すべき点も指摘している。

近年, 生物学的製剤である新規抗リウマチ薬, 分子標的薬などによる薬剤性間質性肺炎が増加しており, 間質性肺炎の早期診断, 鑑別診断の重要性が増している。



本書の編集を担当された久保恵嗣氏は「薬剤性肺障害の評価, 治療についてのガイドライン」作成委員会の委員長であり, 本書において薬剤性間質性肺疾患を薬剤種類別にとりあげ, 現時点における総括をしている。

本書は, 間質性肺疾患の基礎から診断・検査・治療法までを, 豊富な画像を用いて解説し, 病態別の診断手順や治療計画・処方例, 管理の具体的なポイントまでを一冊で理解できるように, 実践的かつ最新情報を提示することを目指して編集されている。

呼吸器を専門としている先生方のみでなく, 間質性肺炎を診療する機会の多い各科の先生方や研修医の方々に, 是非手にとって頂きたい本である。

[B5 頁 344 2010年 定価
9,450円(本体9,000円+税5%)
南江堂刊]